父と史談会の思い出

塩　月　敦　子
故塩月佐一会長二女
（佐伯市匠南区）

佐伯史談会が発足して四十周年を迎えるとのこと、おめでとうございます。先日、高司先生がお見えになり、記念誌を発行することになりましたので、父の思い出の一文を寄せていただけないかとの依頼を受けました。思ってもいなかった突然の要請に困り果ててしまいました。史談会での父の活動状況は、ほとんど知らなかったからです。何を書けばいいのか文案もまとまらず、三輪先生を、お訪ねして助言をいただきました。

父が史談会と、かかわりを持つようになった経緯は一九七五年学校を定年退職後、佐伯教育事務所で社会教育指導員として、文化財行政の仕事に携わるようになったとき、羽柴先生との出会いがきっかけだったのではないかと思います。三年後に事務所を退いた後、史談会の仕事に喜びと生き甲斐を見出し充実した日々を過ごしていおわりに

本年度は、佐伯史談会発足四十周年という節目の年を迎えた。かねてよりの念願だった「佐伯史談」の復刻版も立派に上梓された。復刻された史談は貴重な見事な研究資料として凄い程のエネルギーが、内容豊富に満ち溢れ圧倒される思いがする。今後我々の研修の指針として大いに役立つことを確信している。

ふるさとを愛し史談会を愛し育てて下さった諸先輩の方々の業績に敬服・感謝すると共に二十一世紀に向かってその伝統の重さを、ひしひしと感じている。

来るべき五十周年にむかって新なるスタートをしたいものだと念じて止まない。

た頃のことが、鮮やかに思い出されます。

当時佐伯史談は、羽柴先生がお一人で謄写印刷で発行していましたが、御多忙のため、父が編集を手伝い活字印刷に切り換えることになりました。羽柴先生をはじめ、多くの方々のご指導と勉強堂さんのご協力を得て活字印刷第一号（佐伯史談一一二号）が出来上がったとき、体調をくずして入院されていた先生は、その本をご覧になり父に電話を下さいました。「羽柴先生が、『とても良く出来ていた』と喜んで下さった」と嬉しそうに話した父の顔が思い出されます。その後父は清田先生のあとを引き継いで会長と事務局長の仕事をするようになりました。

しかし、会長二年目に入ってまもなく思いがけない病に倒れ、その職を断念しなければならなくなりました。退院後は、会員としての活動は続けていくつもりで、リハビリに励みながら、口癖のように三年計画という言葉を使っていました。三年後にはある程度健康を取り戻せるという自信があったのでしょう。

事実一、二年後にはそんな希望も持てたのですが…。春が来れば、秋になればという願いもむなしく、あれ程楽しみにしていた「史談会への復帰」という望みはついに果たせませんでした。体が思うように動かず、傍で見ていてもつらい日々でしたが、父自身が一番つらく、悔しかったことと思います。体力・抵抗力の衰えていた父は、前年に風邪をひき微熱が続いていましたが僅か一日の高熱に勝てず、一九九三年二月二十日早朝、今でも信じられないくらいあっけなく逝ってしまいました。やりたいこと、行きたいところを沢山残したまま、さぞ無念だったと思います。

この写真は元気だった頃（一九八五年十月）の球磨文化財探訪旅行のものです。

この四十周年記念誌をどんなに喜んでくれることでしょう。

最後に亡き父とともに史談会が今後ますます発展されますようお祈りいたします。

球磨文化財探訪旅行　川下り
〈１９８５年10月〉